

# 六 廿 化



12

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

冬待つや黄のスカートをはくと巻き  
糸電話の距離ひよどりの母と子は  
鹿を聞く耳そばだててをりにけり  
百舌鳥猛る少すくな毘ひ古こ那な命のみことかな  
岩彫りの斜道滑るよ百舌鳥笑ふ  
七五三草履はみだす男子おのこ足袋  
岩山をそびらに色を変へぬ松  
断崖や鷹巢掛の櫛紅葉  
秋の蝶糸見えねども縫れ合ふ  
秋の蝶赤のまんまに戻り来よ  
秋風や鷹巢掛に鷹もなし  
日没を急げよ鹿の声聞かな  
秋冷の火袋鳥の羽根残る  
水盥を溢れては水澄みにけり

晴れの美しい日に  
鹿嶋神社

柏手や武甕槌神は留守  
灯籠の苔を渴かす秋日かな  
香煙に抱き上げてゐる七五三  
百舌鳥猛る鹿嶋の杜はもと渚  
石柵の堀江増蔵梅紅葉  
野嶋崎桜紅葉を透かし見る  
玉走るしぶきに秋日亀の水  
あきかぜの石に刻まれたる遊女  
手水舎にをみな三人秋うらら  
雁の棹阿波路島へと曲げにけり  
天離る夷の長道ゆ秋の潮  
日翳るを待ちて銀木犀匂ふ  
敗荷となりたる鉢の泡ひとつ  
水琴に当てたる心耳澄みにけり

人丸神社・月照寺

筆柿に東の日の差しきたり  
梅落葉しきりに月照寺の石も  
秋寂や野嶋岬は枝隠れ  
波音は届かざれども秋の潮  
速潮に大門の秋日流れけり  
風吹けば敗荷こちらむきにけり  
うなじ打つ六甲木の実時雨かな  
和雲に眠り深かり後の月  
雁の樟印南の野を過ぎりけり  
残る虫九つ鳴いて七つ鳴く  
足音に応へてくれし残る虫  
山繭や丹後綾部に籠り寝か  
コスモスを泳いで来るよ抱きとめむ  
吾埋めよ公孫樹大樹の落葉して

十一月十二日

平坂万桑先生生誕の地

人の世に幣は汚れず秋深む  
寝顔かな雲の間の後の月  
やあ君か鴟よ天より甘え鳴き  
踏むほどの落葉未し修法原  
菊五輪武蔵嫌ひの隣村  
浮かべけり湯舟明かりに菊摘んで

神戸再度山  
武蔵石生跡

松田裕子様八月二十九日吉幸様の許へ（裏中はがき）

二星の飛ぶ豊茂をまた訪はむ

溝淵弘志さんより『多宝抄』。一生一句を確信

前向きと云ふは途中や秋惜しむ

政子さんより切手

秋灯に妻籠の切手楽しみぬ

山本ミツコさん 十一月六日緊急入院

身に入むや病臥の脇に句帖とは

# 秋風のさつと数へし石畳

松本文一郎

あきかぜのさつとかぞえしいしだたみ まつもとぶんいちろう

男おとこ衆しの指先伸びて風の盆

秋風のさつと数へし石畳

裏木戸の錠を忘れて秋のこゑ

爽やかやけふの一善確信す

竹と竹相打つ音や秋深し

秋風は素風とか、色がない、といわれ肌からしみこんでくる濁いた風。秋風は正面からでなくさつと背後からくる。石畳を歩く人影が秋風が追いついていった。その秋風が石畳の数を数えるように去ったよ、というのだ。過ぎし日を数えるように…。「石の畳を歩いた時も二つの影は離れない」という風に。秋が人恋しいのは、子孫繁栄DNAのなせるわざ。人の細胞にミトコンドリアが住み着いてから、などと野暮なことを言わないでおこう。「波都秋風須受之伎由布弊等香武等曾比毛波牟須批之 伊母年安波牟多米」と大伴家持様が…。

石畳は馬車道・異人坂三鬼館前・長崎八百屋町・小樽運河・など全国いたる所に。

※初秋風（はつあきかぜ）、涼しき夕（ゆふへ）、解かむとぞ、紐（ひも）は結びし、妹（いも）に逢（あ）はむため 家持

# 盆波のうねりを眼下蕎麦ひさぐ 升田ヤス子

盆波のうねりを眼下蕎麦ひさぐ

音びゆんと鳴らぬが不思議流れ星

夜這星あらぬ方より現れにけり

素手で蝉捕る術を子に教へけり

炊く米の量を帰省の子らに問ふ

ぼんなみのうねりをがんかそばひさぐ ますだやすこ

盆波はお盆の頃海岸に打ち寄せてくる大波。台風に伴って発生したうねりが伝わってきたもの。掲句は海を見下ろすところで蕎麦を販いでいる。海は下に見えたり、自らがいる場所より高く窺えることがある。明らかに錯覚のなせる業。うねりの大きな盆波だからなおさらにそう感じるのかも。高く見えて、また低く見え、涼風がうねりから生まれてくるような不思議な感覚の中で主人公は蕎麦を吸っている。ああ、こういう見晴らしのいい場所で静かに蕎麦を商いとして暮らすのもいいなあ、と思っっているのである。これはあくまでも選者のやさやかな希望をいれた感傷（鑑賞）であり、丹後半島の伊根で見た光景が蘇ってくる。

雪 卿 集

父の日

志方章子

好きでなし嫌ひでもなし枇杷する  
家々に傘の花咲く暑さかな  
父の日や母のこと問ふ父もなし  
母逝きし年まで生きてさくらんぼ  
一本の大樹涼しき厨かな

お詫び章子さんのこの作品10月分に洩れていました。

ぬひぐるみ

梶浦玲良子

かなかなの途切れを走るぬひぐるみ  
蒼白の月が小村を吊り上げる  
捨石に秋の入日の滲みゆく  
鴟のこゑ贄見あたらぬいらだちに  
生き返ることが必ず墓磨く

雪 卿 集

醉芙蓉

佐津のぼる

宇治の茶の色よく出たる今朝の秋  
雲かかる嶺ののみ翳り秋早  
秋<sup>あき</sup>渴<sup>がわ</sup>飽<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>ず草食む牧の牛  
詠み続く軍記に夜長長からず  
庭に来る猫の顔昏れ醉芙蓉

市川伊團次

十七夜欠けし所を見つめけり  
夕焼の足纏れゐて影を踏む  
一粒の梅雨をしばらく見つめけり  
弓月のはるけき船の明りかな  
人前にうろうる出たる蜥蜴の子

せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

雨 脚

田尻勝子

雨脚の五又路行き交ふ野分かな  
新涼や神の数式空にあり  
木賊生ふ先に生蕎麦の暖簾かな  
老亭主端正にあり蕎麦を打つ  
頂に針葉樹立ちクリスマス

赤とんぼ

出口誠

朝顔にしぼられてをり隣の木  
耳鳴りの耳に飛び込む虫の声  
飛び立ちて縄張守る秋茜  
赤とんぼ翅のつけ根も赤くあり  
尾の先を水面につけて赤とんぼ

# 蛍雪譚



六甲選

俳句は言葉の切れ者

二十五年十二月号選後に

好きでなし嫌ひでもなし枇杷する 志方 章子

先月号で志方さんの作品が洩れてしまった。編集の大失態である。深くお詫びをしながら進めたい。この句のような場合、多くは季語が動かない保証がない。例えば桃でするとか西瓜はむなど。つまり季語が動く、また覚えにくい、などの欠点があるからこういう句を私は勧めない。だがこの句の場合は、個性の無い味で種か実かどつちつかずの琵琶だからよしとする。主人公は枇杷を啜りながら、そういえば枇杷のはつきりしないこの味に似てるわ、と思っているのである。好きでも無く嫌いでもない人のことか、別の事柄かは判らないけれど、特徴の無い枇杷の味によってふと思っておきたところにこの句の味をよしとする。

家々に傘の花咲く暑さかな

雨漏りがして家の中に傘を開いているのではなく、梅雨が明けて隣近所が申し合わせたように傘を干しているのだ。そのことを「咲く」といった。カラフルな傘の色が梅雨明けの明るさを象徴している光景を詠んだ。

父の日や母のこと問ふ父もなし

しみじみとした父の日の句。「お母さんはどうして？」と問うた父はすでに他界。自らが病気で臥しながら母のことを心配していたのだろう。そのほかに「どんなお母さんだったの」と父に問うていたのかも。事実には少し違いがあるかも知れないが、そのような場面を連想してしまう。父母共に今は亡いのだろう。

父の日や母の日にそういう一齣が蘇って来るのだ。こういうしみじみとした家族詠が志方さんの得意とするところ。

### 母逝きし年まで生きてさくらんぼ

長寿大往生をとげた場合は別として、若くして亡くなった父母に年齢が近づくと、自らの寿命に当てはめて父母の歳まで生きられるかという思いは強い。掲句のように、自らも母が亡くなった歳になった。「ああ、母はこの歳で亡くなったのだ」と生きられた安堵感と寂寥感があざなう。二つが必ずくつついているさくらんぼは母と私。母も大好きな果物だった。それを私は病気がちなながらも生きて今さくらんぼを味わっているのである。二つは母子、三つは黄色いサクランボ。

### 一本の大樹涼しき厨かな

台所の前に一本の大きな木がある。そのお陰で料理をするのに西日で暑い思いをしなくてすむよ、というのである。一本の大樹は、涼しさと家を護ってくれている安心感。木の種類まで云わなかったのがいい。(以下略)

